



日本音楽教育学会ニュースレター

目 次

1. 報告・お知らせ	
1-1 平成 18 年度総会報告	2
1-2 平成 18 年度第 2 回理事会報告	5
1-3 平成 18 年度第 3 回編集委員会報告および『音楽教育実践 ジャーナル』Vol.5 no.1 (通巻 9 号) 特集・原稿募集	9
1-4 40 周年記念論文集編集委員会からのお知らせ	11
2. 大会のご案内・報告 (日本音楽教育学会関係)	
2-1 第 37 回日本音楽教育学会千葉大会を終えて	11
2-2 第 37 回全国 (千葉) 大会報告	12
2-3 「日韓合同ゼミナール」の第 1 次案内	13
3. 海外トピックス	
3-1 海外の動向 (1) アメリカ	14
3-2 第 4 回 韓国幼児教育学会 国際学術大会に参加して	16
3-3 第 6 回 APSMER・ISME アジア・太平洋地域大会 研究発表, ラウンドテーブル等発表申し込み案内	17
4. 国内トピックス	
「伝統文化の継承と発展—音楽教育の現場から—」 声からはじめる日本音楽の指導	18
5. 新刊案内 『仕組まれた学習の罫』・『からだと言』	19
編集後記	20

1. 報告・お知らせ

1-1 平成18年度 総会議事録

日時：2006年10月28日（土）17：15～18：20

場所：千葉大学教育学部視聴覚教室

開会に先立ち、小山事務局長より定足数（会員総数の5分の1）に達することが確認され、規定により総会が成立した。（会員総数1577名、出席者61名、委任状253名）

1. 開会の辞（岩崎副会長）
2. 挨拶（坪能会長）
3. 議長選出：森下修次氏（新潟大学）が選出された。
4. 報告

(1) 会務報告（小山事務局長）

以下の通り、昨年度大会以降の会務が報告された。例年に比べ、委員会開催件数が多かったとの報告があった。（2006年7月2日までの会務はすでにニュースレターに掲載されており、ここでは省略）

7月22日（土）・23日（日） 夏期ワークショップ（東京学芸大学）

7月30日（日） 平成18年度第2回編集委員会（埼玉大学東京ステーションカレッジ）

8月14日（月） 平成18年度第1回会則改正委員会（静岡大学）

8月31日（水） 音楽教育実践ジャーナル Vol.4 no.1, ニュースレターNo. 25
第37回大会プログラム発送

9月19日（火） 日韓共同ゼミナール準備委員会（日本女子大学）

10月27日（金） 国際交流委員会（千葉大学）

平成18年度第3回編集委員会（千葉大学）

平成18年度第3回常任理事会（千葉大学）

平成18年度第2回理事会（千葉大学）

10月28日（土）・29日（日） 第37回大会（千葉大学）

10月29日（日） 40周年記念論文集編集委員会（予定）

(2) 編集委員会報告（木村編集委員長）

「音楽教育学」と「音楽教育実践ジャーナル」の投稿規程に関して、若干の内容について改正の提案をし、理事会で承認された。その詳細については、学会出版物、ホームページを通して広報する。

5. 協議事項

(1) 平成17年度会計報告（今川会計担当）・監査報告（杉江会計監事）

大会プログラム p.86・87 をもとに報告が行われた。また、監査の結果会計報告に相違ないことが報告された後、会計報告が承認された。

(2) 平成19年度事業計画（小山事務局長）および予算（今川会計担当）

下記事業計画が示され、承認された。また、予算案が説明され原案通り承認された。なお、支出の部の「次年度繰越金」の示し方について八木会員（埼玉大学）から質問があり、今後の検討事項となった。

<平成 19 年度事業計画>

平成 19 年 5 月中旬	平成 18 年度会計監査 平成 19 年度第 1 回編集委員会 平成 19 年度第 1 回常任理事・理事会
6 月初旬	研究発表（口述）・共同企画申し込み締め切り
下旬	学会誌第 37-1 号・ニュースレターNo.28 発行
7 月上旬	平成 19 年度第 2 回常任理事会，研究発表受理通知
(未定)	平成 19 年度第 2 回編集委員会
8 月下旬	音楽教育実践ジャーナル Vol.5 No.1・ニュースレターNo.29 発行
11 月 9 日	第 3 回編集委員会・第 3 回常任理事会・第 2 回理事会
11 月 10～11 日	第 38 回大会 会場：岐阜大学
12 月下旬	学会誌第 37-2 号・ニュースレターNo.30 発行
平成 20 年 1 月中旬	第 9 回音楽教育ゼミナール（日韓ゼミナール）
2 月	平成 19 年度第 4 回編集委員会，平成 19 年度第 4 回常任理事会
3 月末日	音楽教育実践ジャーナルVol.5 No.2・ニュースレターNo.31 発行 平成19年度会計決算

(3) 会則・諸規程改定について

会則改正案，細則改正案，選挙管理委員会規定改正案，会長・理事選挙実施要領改正案，編集委員会規定改正案について資料が示された。原案作成に当たった会則改定委員会（委員長：村尾，委員：北山，杉江，藤沢，吉田。10 月 3 日の答申をもって解散）からの説明を受けて質疑応答がなされ，採決の結果承認された。なお，会則改定案第 3 条（2）について，『音楽教育研究ジャーナル』の位置づけになお検討の余地があるとの議論がなされ，本条項については新会則として承認するものの，来年度の総会に向けて理事会で審議することとなった。新会則・諸規程は，『音楽教育学』第 36 巻 2 号に掲載する。

(4) 第 38 回大会について（岐阜大学）

朝田実行委員長より挨拶があった。開催日は，2007 年 11 月 10 日～11 日。

(5) 第 39 回大会候補地について

2008 年度の大会は，国立音楽大学で開催される予定であるとの説明があった。

6. その他

会長より，第 9 回音楽教育ゼミナールは日韓共同セミナーとして平成 20 年 1 月中旬に開催予定であること，第 40 回大会において「学会賞」を設ける予定であることが報告された。

7. 議長解任

8. 閉会の辞（岩崎副会長）

<平成 19 年度予算>

収 入		
科 目	18 年度予算	19 年度予算
前年度繰越金	1,889,054	1,149,054
正会員会費	10,290,000	11,053,000
	(7000×1470)	(7000×1579)
学生会員会費		
団体会員会費	30,000	50,000
賛助会員会費	340,000	270,000
学会誌売上金	350,000	350,000
本誌代		
送料収入		
大会参加費	1,300,000	1,300,000
雑収入	20,000	20,000
計	14,219,054	14,192,054

支 出		
科 目	18 年度予算	19 年度予算
大会運営費	1,500,000	1,500,000
大会本部経費	700,000	700,000
事務局経費	600,000	600,000
プロジェクト研究	200,000	200,000
学会誌費	2,430,000	2,430,000
音楽教育学発行費	1,230,000	1,230,000
音楽教育実践ジャーナル		
発行費	1,200,000	1,200,000
ニュースレター費	400,000	400,000
例会運営費	900,000	700,000
通信・郵送費	1,250,000	1,200,000
会議費	150,000	50,000
旅費・交通費		
(18年度は宿泊費を含む)	1,900,000	1,800,000
翻訳費	0	50,000
事務局費	3,200,000	3,200,000
事務費	320,000	320,000
人件費	1,830,000	1,680,000
事務局運営費	1,050,000	1,200,000
分担金	200,000	200,000
選挙積立金	150,000	150,000
退職引当金	20,000	0
ゼミナル積立金	150,000	150,000
研究出版基金	0	0
学会基金	0	0
予備費	820,000	700,000
小計	13,070,000	12,530,000
次年度繰越金	1,149,054	1,662,054
計	14,219,054	14,192,054

1-2 平成18年度第2回理事会報告

日時：平成18年10月27日(金) 14:15~15:40

会場：千葉大学大学会館(けやき会館)3階レセプションホール

出席：今川・岩崎・小川・奥・木村・熊木・小山・阪井・佐野・島崎・嶋田・田邊

坪能・中山・降矢・宮野・村尾・山本 <参事>大沼(記録補助)

欠席：井口・岩井・加藤・篠原・寺田・南・安田・若尾

【報告事項】

1. 会務報告等(小山)

資料に基づき、会務報告がなされた。(総会議事録参照)

2. 各委員会報告

(1) 編集委員会(木村)

・投稿原稿の査読等の状況について報告があった。

『音楽教育学』36-2号に2件の論文を採択した。

『音楽教育実践ジャーナル』Vol. 4 no. 2(通巻8号)に2件の自由投稿論文原稿を採択した。

・9月末日までに『音楽教育学』への新たな投稿が3件あった。

・『音楽教育実践ジャーナル』Vol. 5 no. 1(通巻9号)の特集テーマは「J-POPが学校音楽に与える影響」に決定。2007年4月末を締切とし、ニュースレター、学会ホームページ等で募集広報する。

(2) 会則改定委員会(村尾)

会則改訂委員会を開催し、坪能会長に最終答申した旨報告された。

(3) 国際交流委員会(奥)

・世界へ発信する英文ホームページを作成中。参事への協力依頼、ネイティブ・チェックの謝礼について検討中である。

・海外からの情報受信については、これまで小川(昌)委員がすべてを担当してきたが、今後は英語圏：小川委員、独語圏：中地委員、アジア圏：田中委員が分担して行なう。

・ニュースレターにて定期的に国際交流委員会の報告、ISME、APSMERの広報活動を行なう。
なお、次回ISME(ボローニャ大会)のグループ旅行については検討中。

(4) 40周年記念論文集準備委員会(今川)

・ニュースレター第25号訂正

誤：8人が編集委員として→正：7人が編集委員として

・10月29日に第1回編集委員会を開催する予定。

3. 例会報告(各担当理事)

- ・各担当理事から例会の報告がなされた。(詳細は『音楽教育学』第36巻2号参照)
なお、今後の開催予定は次のとおり(ホームページ参照)。

東北：12月9日(福島大)／北陸：2月頃／関東：3月中旬(筑波大学附属小)

東海：音楽学会と合同で開催予定(静岡大：時期未定)／近畿：2月または3月

中国：3月24日(島根大学)／四国：3月17日(香川大)

九州：3月上旬(鹿児島大)

4. 第38回岐阜大会・第39回大会について(坪能)

- ・第38回岐阜大会が平成19年11月10日～11日に開催されることが報告された。
- ・第39回大会が国立音楽大学にて開催されることが報告された。

5. その他(小山)

総会資料訂正：平成19年度の「夏期ワークショップ」を削除。平成20年1月に日韓共同セミナーが開催され、実行委員の過重負担を避けるため。

【協議事項】

1. 会則・規定改定について(坪能)

- ・村尾会則改定委員長より、会則・規定の文言整理を行い、会長に答申したことが説明された。改正案は承認され、総会へ提出されることとなり、これをもって委員会は解散。
- ・第12条(地区の再編、統合)、編集委員会任期などに関する会則施行時期についての質疑があった。新会則・規則は、第37回総会で承認されれば10月28日より施行されるが、例会および委員任期については、混乱を避けるため4月からの施行とする。現委員任期の詳細は、次回常任委員会にて小山事務局長より草案が提出され、検討されることとなった。

2. 投稿規定改定について(木村)

- (1) 学会誌検討委員会の答申に基づいて、編集委員会より『音楽教育学』及び『音楽教育実践ジャーナル』の投稿規定案が示され、承認された。
- (2) 論文に使用する言語については、今後の課題として検討する。

3. 40周年記念事業

(1) 40周年記念誌(岩崎)

- ・詳細は未定であるが『30年のあゆみ』に準じて作成する予定である。

(2) 学会賞(坪能)

- ・他学会の規定をもとに検討中の規定案が示された。

① 40周年に向けて第1回受賞者を決定する。

② 過去2年間(第1回については過去4年間)に学会誌(『音楽教育学』, 『音楽教育実践ジャーナル』)に掲載された研究論文の中から1編を選ぶ。

③ 審査委員は、当該期間の学会誌編集委員長、学会誌編集委員で常任理事、理事の経験者

の中から、研究分野・方法を考慮して、会長が6人を指名し、常任理事会で決定する。

④ 審査委員長は委員により互選する。

・以上の案を大筋において承認し、実施に向けての詳細は今後の継続審議となった。

4. 第38回・39回大会プロジェクト研究について(坪能)

テーマ：「音楽系大学のイノベーション」

第1年次(第38回大会)：「音楽学部・音楽大学の変容」東京藝術大学、GPを受けた音楽大学、その他新しい動向をみせているところ。

第2年次(第39回大会)：「教員養成の展望と課題」(コーディネーター：佐野常任理事)

5. 第9回音楽教育ゼミナールについて(島崎)

(1) 実行委員長が加藤、事務局長が島崎に決定し、平成20年1月中旬に日本女子大学にて、日韓合同ゼミナールというかたちで開催されることとなった。

(2) 内容については12月の実行委員会で検討する。予算獲得にむけて日本学術振興会へ、韓国と共同開催セミナーの形で申請する予定である。

6. 日韓交流について(坪能)

・韓国音楽教育学会会長クウォン氏と坪能会長の間で書簡のやりとりがあり、日本側の要望に対して、韓国側から以下のような回答があった。

①韓国音楽教育学会は日-韓音楽教育セミナー(2008年1月予定)に積極的に協力し、参加する。代表者及び実行委員の数は6人とする。

②日本音楽教育学会会員が日本音楽教育学会の推薦(または審査)を受ける場合、韓国音楽教育学会学会誌に‘特別寄稿’の形で載せる。使用言語は‘英語’とし、原稿作成法は韓国音楽教育学会の規定を原則とする。

③韓国音楽教育学会会員が日本音楽教育学会学会誌に投稿として希望をする場合、その論文を韓国音楽教育学会編集委員会で審査して日本音楽教育学会に推薦する。この時論文作成要領は日本音楽教育学会の規定に準じる。

④韓国音楽教育学会の会員が、日本音楽教育学会が開催する学術セミナー(大会)に口頭発表を希望する場合、前もって韓国音楽教育学会で決めた所定の審査過程を通すこととする。韓国音楽教育学会会員ではない場合は別途の規定を置く。(この部分に対しては日本側と協議する)

なお④に関しては、韓国音楽教育学会の審査を経過したものについては、大会参加費のみの納入となり、学会年会費の納入は必要としないことが決定した。

7. 入退会者承認

7月2日以降の新入会申込者24名、申し出退会者8名が承認された。

新入会者

3368	中村 奈保	鳥取大学大学院 (院生)
3369	稲田 なおみ	京都教育大学大学院(院生)
3370	原田和典	鹿児島大学大学院 (院生)
3371	上村 勉	鹿児島大学大学院 (院生)
3372	鈴木志穂	静岡大学大学院 (院生)
3373	植田恵理子	名古屋女子大学大学院 (院生)
3374	阿部祐治	兵庫教育大学連合大学院 (岡山大学所属)
3375	西島千尋	金沢大学大学院 (院生)
3376	藤田隆則	京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター
3377	戸澤 悦子	埼玉県熊谷市立熊谷西小学校
3378	高田真希	埼玉大学大学院 (院生)
3379	坂見明信	北海道教育大学大学院 (院生)
3380	河邊昭子	広島大学附属小学校
3381	渥美雅子	日本大学大学院 (院生)
3382	萩原美保	
3383	小山朱美	滋賀大学大学院 (院生)
3384	戸谷登貴子	千葉大学大学院 (院生)
3385	西本夏生	東京藝術大学大学院 (院生)
3386	岩崎高明	神戸市立横尾中学校
3387	吉江路子	東京大学大学院 (院生)
3388	関 洋子	東京藝術大学大学院 (研究生)
3389	高橋多喜子	淑徳大学
3390	五十嵐雅子	聖カタリナ大学短期大学部
3391	大西通子	滋賀大学大学院 (院生)

申し出退会者

188	秦 祥子	岐阜大学名誉教授
868	泉 健	和歌山大学
1008	小阪恵一	神戸女子短期大学
2094	小林友里	
2369	藍原邦子	美祿市立伊佐中学校
2735	西元久明	鹿児島大学大学院 (院生)
2958	高橋映子	山形市立第二小学校
3207	川村優子	

(平成 18 年 10 月 25 日現在 正会員数 1577 名)

8. その他

大会の開催時期・期間見直しの必要が提言され、他学会開催日との調整においてできるだけ先に日程を決定し、今後の課題として検討することとなった。

【次回理事会】

常任理事会：平成 19 年 2 月 18 日(日)14:00～ 日本女子大学

理 事 会：平成 19 年 5 月 13 日(日)14:00～ 立教大学

1-3 平成 18 年度第 3 回編集委員会報告

編集委員会委員長 木村次宏

平成 18 年 10 月 27 日、千葉大学において、今年度第 3 回目の委員会が開催され、以下の事項について検討された。

1. 投稿原稿（再提出を含む）の査読結果等について

- ・「音楽教育学」7件、「音楽教育実践ジャーナル（自由投稿）」2件が検討された。

「音楽教育学」の投稿に関しては、36-2 号に 2 件を掲載、また「音楽教育実践ジャーナル（自由投稿）」の投稿に関しては、通巻 8 号に 2 件を掲載することとなった。

2. 新たな投稿原稿の査読者等の決定等について

- ・「音楽教育学」3 件の投稿原稿について、査読手続きに入ることを確認した。

3. 音楽教育実践ジャーナルの編集について

- ・下記の各号について、それぞれ検討をおこなった。

通巻 7 号の反省－編集スケジュールをより明確にし、作業の効率化を図る必要がある。

通巻 8 号の進捗状況－依頼原稿の集約状況、自由投稿の投稿状況について確認した。

通巻 9 号の特集内容－特集の募集内容について確認し、学会ホームページやニュースレター等で公表することとした。特集内容は「J-POP が学校音楽に与える影響」とした。

4. 「音楽教育学」36-2 号の編集について

- ・担当者及び作業内容等について確認した。なお今年度より、大会号には大会発表者の氏名と発表タイトルを掲載することとした。

5. 投稿規程の改正について

- ・学会誌検討委員会の答申を受け、「音楽教育学」及び「音楽教育実践ジャーナル」の投稿規程に関して見直しをおこなった。主な改正点は、1) 投稿原稿の送付時におけるフロッピー・ディスクの添付を廃止したこと、2) 「音楽教育実践ジャーナル」においても、実践論文、実践報告の掲載は、会員 1 名につき 1 年度に 1 件を限度としたこと、3) 「音楽教育学」及び「音楽教育実践ジャーナル」の投稿規程の中で、類似した表現部分を整理したこと、等である。

6. その他

- ・「音楽教育学」37-1 号の編集担当者を決定した。
- ・次回の委員会を 3 月に開催（日時等については、後日調整）することとした。

〈お知らせ〉

*投稿規程の改正内容の詳細については、今後発行される学会誌等で各自ご確認下さい。

*編集委員会からのお知らせを学会ホームページに掲載させていただいています。定期的にチェックをお願いいたします。

『音楽教育実践ジャーナル』
Vol. 5 no.1 (通巻9号)特集・原稿募集

『音楽教育実践ジャーナル』 通巻9号(2007年8月発行)の特集に向け、下記の要領で原稿を募集いたします。

「J-POP」(ジャパニーズ・ポップス: Japanese Pop Music)という用語は、1988年に試験放送を開始したJ-WAVE(FM放送局)によって命名されたことに端を発しますが、そうした由来を紐解くまでもなく、若者の音楽文化を象徴する語として広く使用されています。かつての「流行歌」や「歌謡曲」、あるいは「ニューミュージック」といった用語が、使う人によってさまざまに定義づけられるのに対し、この「J-POP」は包括的であり、共通のイメージを共有できるといった特徴があります。しかし、教科書で扱われている「ポピュラー音楽」と、生徒達が持っている「J-POP」のイメージの間には、かなりのギャップがあるようです。

音楽文化が消費文化として語られる昨今、子ども達にとって、また私たち教師にとって、「J-POP」はどのような意味をもたらしているのでしょうか。教材として扱う場合、どのような点に留意したらいいのでしょうか。目まぐるしく変わるヒットチャートの曲をどのようにとらえればいいのでしょうか。1990年代後半から、子ども達のポピュラー音楽に対するコピーイング力や、アマチュアバンドの学習法に焦点を当てた興味深い論文が発表されていますが、学校教育現場での指導法、教材のアレ

ンジ、他領域との関連など取り組まなければならない課題は山積しているといえるでしょう。

そこで、今回の特集では、J-POPを取り巻く諸現象をとりあげることにしました。実践研究や調査報告、授業分析はもちろん、歌謡史の分析や諸外国との比較といった観点からの原稿も歓迎です。「ジエンダー」「ドラマの主題歌」「音楽産業」「カラオケ」といった用語も、キーワードとして挙げられると思います。授業実践に基づくテーマだけでなく、学校以外の音楽事情や若者観を題材とした論文も受け付けたいと思います。皆様の投稿をお待ちしています。

なお、投稿の際には、特集への募集原稿であることを、必ず、朱筆で明記してください。

- 特集タイトル: 「J-POP が学校音楽に与える影響」
- 投稿原稿締切: 2007年4月末日必着
(編集の都合上、締切の時期が早くなっていますのでご注意ください。)
- その他: 書式、字数等は『音楽教育実践ジャーナル』投稿規定をご参照ください。

採択された原稿については、編集委員会から5月末日までに投稿者に連絡いたします。

編集委員長 木村次宏

1-4 40周年記念論文集編集委員会からのお知らせ

40周年記念論文集編集委員会委員長 佐野 靖

来る2009年度の第40回大会をめざして、学会40周年記念論文集(タイトル未定)を刊行することになりました。「乳幼児」「知覚・認知」「学校教育」「社会教育・生涯教育」「歴史」「障害児・療法」の6分野で論文の公募を予定しております。内容の詳細が決まり次第、随時ニュースレターでお知らせいたします。なお、編集委員は、以下の7名が担当いたします。(五十音順)

今川恭子 小川容子 阪井 恵 佐野 靖
杉江淑子 南 曜子 安田 寛

2. 大会のご案内・報告(日本音楽教育学会関係)

2-1 第37回日本音楽教育学会千葉大会を終えて

大会実行委員長 宮野 モモ子

第37回日本音楽教育学会全国大会は、「いま、学校音楽科教育に求められるもの—研究者、音楽科教員の役割を探る—」という大会実行委員会企画を掲げ、2006年10月28日~29日千葉大学において、380余名の参加者を得て開催されました。

内容は基調講演、シンポジウム、学生演奏、ポスター発表、プロジェクト研究、共同企画そして口頭発表と院生フォーラムが時間配分よく生まれ、盛会のうちに閉会いたしました。しかし機器の不備などで各会場の発表者の方々にご迷惑、ご不便をおかけいたしましたことに関しまして、深くお詫び申し上げますとともにご協力をいただきまして感謝申し上げます。

この2日間を通しまして大会実行委員会として特に深く心に残りましたのは、第1日目の基調講演とシンポジウムでした。それぞれ基調講演は「教育改革の現状と音楽科教育への期待」、シンポジウムは

「学校教育と学力〜いま音楽科教育研究は何をすべきか〜」というテーマで話されました。

今まさに急ピッチで進められている教育改革に触れながら、教育課程の中の音楽科教育について、銭谷初等中等教育局長のお話しを伺う機会を得、当面する我が国の教育についての厳しさをリアルタイムに目の当たりに致しました。更に続く4氏のパネリストによるご提言には、さながら宝石箱を覗きこんだようなきらめきと鋭い光を放っておりました。そして、コーディネーターによって話題が切り込まれていく基調講演からシンポジウムへの流れは、まさにこの時期にこそ参会者が共有したいことであり、この地域だから可能なことを、実現できたのではないかと感じました。大会実行委員会として、お越しいただいた皆様へのお土産となったのであれば、一寸の安堵感とともに、大変幸せに感じるところです。また、院生フォーラムでは会場の壁一面に所狭し

と張られていたポスターからは、今後の学会の発展を暗示するかのように、若い研究者の存在をアピールしていたように思います。

こうして大会を引き受けさせていただき、今更ながら考える事は、学会大会の意義は、学会が個人入会であるが故に、個々の意識が調査・研究の成果を発表し学術的な新たな知見を得、また相互に情報を交換することのみになりがちだが、それらを中心としながらも、一方で、音楽教育の一つの運動体としての社会性をも持ちえるものとなる機会を作り出す

一年一回の場としての意義を発揮した運営が大切であるということでした。今後益々学会が充実発展することを期待しつつ、岐阜大学へバトンをお渡しすることにしたいと思います。最後になりましたが、今回の大会においては、現職の先生方、卒業生そして修了生、また現役の学生たちが大会事務局長を中心に活発な動きをしていただきました。そして参加者各位におかれましては大会の運営にご協力をいただきましたことに、心より感謝とお礼を申し上げます。

2-2 第37回全国（千葉）大会報告

寺田貴雄（北海道教育大学）

第37回全国（千葉）大会は、2006年10月28日（土）・29日（日）に千葉大学を会場として開催されました。近年の本学会会員の研究テーマの広がりを反映して、研究発表件数の多さと多彩さが際だつ大会でした。

一日目の午前中は、会員諸氏による研究発表25件が4つの会場とポスター発表により行われました。いずれの会場においても、個々の発表に対し熱心な質疑応答、意見交換がなされ、日本の音楽教育学研究の領域的な広がりを実感させるものでした。

午前中の研究発表に並行して、常任理事会企画のプロジェクト研究1が行われました。「学力論争と音楽教育(2)―音楽科における〈ゆとりの教育〉は子どもたちに何をもたらしたか―」と題された研究は、現在の学校の音楽科授業の実態を、教育行政・授業実践者・若者の音楽活動実態の各視点から検討するものでした。金本正武（千葉大学）、熱田庫康（さいたま市立大宮南小学校）、村尾忠廣（愛知教育大学）の各氏からの提言をもとに活発な討議がなされました。

一日目の午後は、大会実行委員会企画「いま、学校音楽科教育に求められるもの―研究者、音楽科教員の役割を探る―」が行われました。銭谷眞美氏（文部科学省初等中等教育局長）による基調講演「教育改革の現状と音楽科教育への期待」では、教育基本法改正や教育課程改定の現状についての情報提供がありました。基調講演に続き、シンポジウム「学校教育と学力―いま音楽科教育研究は何をなすべきか―」が行われました。無藤隆（白梅学園大学）、山本文茂（名古屋芸術大学）、西村佐二（聖徳大学）、阪井恵（明星大学）の各氏をパネリストに迎え、これからの音楽教育のあり方、現今の音楽科がはぐくむべき学力とは何か、学校教育における音楽科の役割について、各氏の提言に基づき議論が交わされました。

シンポジウム後は、千葉大学吹奏楽団による若々しい演奏に続き、総会が行われ、学会運営に関わる各議案が審議されました。

一日目のプログラム終了後の懇親会では、会員相互の情報交換と親睦が深められました。

大会二日目は、午前中に研究発表 24 件が 6 会場に分かれて行われ、前日に引き続き精力的な意見交換がなされました。並行して、共同企画「異文化理解を踏まえた多文化音楽教育の教育方法の提案と検証Ⅲ」の発表も行われ、多文化音楽教育の実践に向けて、その理念と指導法について報告がなされ、活発な研究討議が行われました。

また、昼食前には若手研究者の交流を意図した院生フォーラムも開かれ、各大学院の院生の研究交流が行われました。

二日目の午後は、会員による研究発表 22 件が 6 会場に分かれて行われたのと共に、常任理事会企画プロジェクト研究 2 「日本音楽をどのように捉えた

らいいのか―場・伝える・身体―」が並行して開かれました。伊野義博（新潟大学）、澤田篤子（洗足学園音楽大学）、藤田隆則（京都市立芸術大学）の 3 氏から、日本音楽はどのような場で生まれ、どのように伝えられ、その際の身体のありようは如何なるものであるのかについて、報告がなされ、熱心な討議が行われました。

以上、第 37 回全国（千葉）大会は盛会裡に終わることができました。首都圏での開催ということも影響してか、研究発表件数の多い規模の大きい大会となりました。宮野モモ子大会実行委員長をはじめとする実行委員の皆様、本大会の運営にご尽力いただきました皆様に心から感謝申し上げます。

2-3 第 9 回音楽教育ゼミナール（日韓合同ゼミナール）

大会テーマ：「日韓両国の音楽教育の理論と実践～ 伝統音楽に着目して～」

☆日時：2008年1月12日（土）・13日（日）

☆会場：日本女子大学（東京）

～ 日韓合同ゼミナール発表者募集！ ～

日韓合同ゼミナール実行委員会委員長 加藤富美子

第 9 回音楽教育ゼミナールは、2002 年に姉妹学会として交流協定を結んだ韓国音楽教育学会との合同ゼミナールとして開催されます。歴史的に関係の深い両国の音楽と文化についての理解を深め、両国の音楽教育の理論と実践に関する研究を深める絶好の機会となると思われます。

ラウンドテーブル、ワークショップ、演奏、レクチャーコンサートの発表者を同封の別刷りの要領で募集いたします。会員の皆様のご応募をお待ちいたしております。

☆応募締切：2007年2月15日（木）

☆応募方法 別刷要領に則って、学会事務局まで電子メールならびに

FAXでお申し込みください。

Fax：042-381-3562 e-mail：onkyoiku@remus.dti.ne.jp

3. 海外トピックス

3-1 【海外の動向-その1】

国際交流委員会委員 小川昌文（横浜国立大学）

1. アメリカにおける音楽（芸術）教育推進団体
わが国にはほとんど見られない活動として、アメリカでは「音楽教育支援」（music education advocacy）というジャンルが音楽教育の中に確立し、音楽教育の重要性を社会にアピールし、かつ音楽教育活動を支援する団体が数多く存在する。ここではその中から、ホームページを手がかりにいくつか紹介する。

[MUSIC FOR ALL] <http://music-for-all.org/>

「ミュージックフォアオール（音楽はみんなのもの）」は、音楽教育の重要性を社会に認識させ、学校における音楽教育の地位をさらに高めるために活動している団体であり、すべて個人の寄付金によって運営されている。主たる活動としては、学校における音楽プログラム内容についてのアドバイスや、音楽教育の学校における必要性を科学的に裏付ける調査、またマスコミや地域に対する広報活動が行われており、主としてソフト面における音楽教育支援活動が中心である。

この団体の最も重要な活動内容としては、音楽教育の重要性を裏付けるための基本的なデータを蓄積し、無償で提供していることであろう。この、ホームページには「音楽教育の利点」として、音楽教育の研究成果の結論部分のみをわかりやすく箇条書きにしている。以下その一部を紹介する。

*公立学校で音楽の授業を履修した生徒は、大学入学共通試験（SAT）の平均点が、履修しなかった生徒と比べて107点以上高かった。

*吹奏楽やオーケストラに参加している中学校の生徒は、飲酒、喫煙、ドラッグなどに関わる割合が最低であった。

*2003年のギャロップ調査では、95パーセントのアメリカ人が音楽は人間性豊かな教育のための核であると信じている。

[Americans for the Arts] <http://www.artsusa.org/>

「アメリカン・フォア・ディ・アーツ」は、音楽だけではなく、芸術のあらゆる分野をカバーし、学校を含めて社会全体に芸術をより浸透させていくことを目的とした団体である。ここはとりわけ政治的活動と広報活動に重点をおいており、特に国や地方における政治と芸術の関わりに関する情報は他に類を見ないほど充実している。

例えば、ホームページの「Policy & Advocacy（政策と支援）」のメニューを見ると、国会や地方議会の芸術支援に関する動向、中央政府、州政府の芸術支援に対する現在の政策および法律、各州における芸術支援組織の一覧、芸術支援に関連する法案の内容と評決結果、芸術支援に貢献し、表彰を受けた政治家などの情報がたちどころにわかる。また、それに加えて、個人が直接議員にアプローチできるように、芸術支援に力を入れている政治家にホームページ上でコンタクトできるようになっている。

さらにこの財団は、特に学校における芸術教育推進の為に「National Art Education」という支部組織を作り、「ART. ASK FOR MORE（もっと芸術を!）」というキャッチフレーズで寄付金を募って活動をしている。ここでは、学校における芸術教育に関する情報をほぼ網羅すると共に、芸術教育の利点について明らかになっている研究成果や関連の情報が提供されている。そして、2002年か2004年までの3年間に、約1億ドルの寄付金が寄せられ

ている。これは全米のすべての寄付金受付団体の中で3年連続トップ10に入っている。

[American Music Conference]

<http://www.amc-music.com/>

「American Music Conference (アメリカ音楽協議会)」は、1947年に設立された音楽教育推進のための非営利団体で「NAMM(国際音楽産業連盟)」を母体とする。この団体は、「MUSIC FOR ALL」と並んで、学校の音楽教育を含む、あらゆる場面における音楽教育活動の推進と支援を行っている。

このサイトでは、音楽教育の重要性をアピールする情報が満載されており、特に音楽と脳、音楽と福祉、音楽と学力、音楽と発達についての研究成果が多数掲載され、科学的、客観的なデータを必要な人にとっては重宝である。例えば次のような研究成果が掲載されている。

*音楽授業を履修している高校生は、履修していない高校生よりも進学共通テスト (SAT) においてはるかに高い成績を挙げた。(MENC,2001)

*10年間、のべ2万5千人にわたる調査によって、音楽に関わっている児童、生徒はその経済的、社会的背景の如何に関わらず、音楽に関わっていない児童生徒と比べてSATなどの標準テストのみならず、国語読解力テストにおいてもより高い成績を挙げた。(James Catterall, UCLA, 1997)

*グループによる打楽器演奏は、がん細胞を攻撃するキラー細胞を著しく増加させた。

(Connie Tejada Giles Communications, 2001)

(上記は、2005年12月に発行された『教育音楽』中高版2006年1月号(pp.47-51)に掲載された筆者の記事「音楽を学校から閉め出さないで！-アメリカの音楽教育の動向と音楽教育推進・支援運動の現状-」を基に、

学会ニュースレター用に作成し直したものです。)

2. アメリカで開催される今後のシンポジウム、大会について

来年以降アメリカで開催される音楽教育の大会の主要なものを以下に紹介する。

1) サンコースト音楽教育シンポジウム(Suncoast Music Education Research Symposium)

期間：2007年2月3日—7日

場所：南フロリダ大学 (フロリダ州タンパ)

大会テーマ：現代世界における総合的な音楽教育シンポジウム公式ホームページ

<http://smers.arts.usf.edu/>

基調講演者：Margaret Barrett (オーストラリア・タスマニア大学)

John Hylton (ミズーリ大学),

Bennett Reimer (ノースウェスタン大学)

2) 北部テキサス音楽教育シンポジウム (North Texas Symposium on Research in Music Education)

期間：2007年4月12日—14日

場所：北テキサス大学 (テキサス州デントン)

大会テーマ：なし

基調講演者：Robert Cutietta (南カリフォルニア大学), Hildegard Froehlich (北テキサス大学)

3) メイデイグループ コロキウム

期間：2007年6月14日—17日

場所：ミネソタ大学医学センター (ミネソタ州ミネアポリス)

大会テーマ：生命のメッセージを捉える-音楽教育音楽教育者、音楽学習者の健康について

3-2 第4回 韓国幼児教育学会 国際学術大会に参加して

駒 久美子 (日本女子大学大学院生)

2006年10月21日～22日、ソウル女子大学(韓国、ソウル)において、第4回韓国幼児教育学会国際学術大会(2006 The Korean Society for Early Childhood Education /The 4th Biennial International Conference)が開催された。そして、The World Organization for Early Childhood Education(OMEP)もまた同時開催されていた。さわやかな秋晴れのもと、ソウル女子大学の美しいキャンパスには、韓国内外から人々が多く集い活気に溢れていた。2日間にわたる大会は、”Transcending Modernity in Early Education and Care”というテーマで、招聘講演2本、基調講演、韓国音楽演奏、2つのシンポジウム、いくつかのテーマにわかれた研究発表42本、特別セッションなど幼児教育のさまざまな分野における充実したプログラムであった。

招聘講演のひとつには、日本保育学会会長の小川博久氏の「日本の育児政策 エンゼルプランにおける幼稚園教育からみた問題点」があった。基調講演は、G. Dahlberg氏による「聴くことに基づいた許容と受容の教育学：幼児教育における倫理的・行政的視点」で、イタリアのレッジョ・エミリアの教育を例にして、子どもたちの声や考えをよく聴くことの重要性を述べていた。

特別セッションでは、日本音楽教育学会会長の坪能由紀子氏による「日本の音楽教育における音楽教育の理論と実際」というタイトルで、ワークショップが行われた。参加者は、幼稚園や保育

園などの現場の先生方や、大学院生など若い人々が多く集い会場に入りきれないほど大盛況であった。ここでは、参加者一人ひとりが表現すること、リーダーと参加者とのコールアンドレスポンス、少人数で短いリズムパターンを重ねた音楽づくり、これらの活動をふまえて、最後に小グループにわかれてポルカのリズムをもとにしながら、音楽づくりを行った。いずれの活動でも、参加者一人ひとりが生き生きと輝いていて、本当に楽しんでいる様子が伝わってきた。坪能氏はこのセッションのしめくくり、リーダーの役割として必要なことのひとつに、「常に子どもたちの音をよく聴くこと」を強調していた。これは、基調講演のDahlberg氏の子どもたちの声や考えをよく聴くこととも、共通であるといえよう。90分のセッションはあっという間に終了してしまったが、坪能氏は終了後もたくさんの参加者から質問を受けていた。私にとっても非常に実りの多いセッションであった。



ワークショップの様子

参加者みんなで音楽づくり

3-3 第6回アジア太平洋音楽教育研究シンポジウム (APSMER)
ISME アジア・太平洋地域大会 (バンコク, タイ)
2007年7月-25~27日

研究・ラウンドテーブル・ワークショップ発表申し込みのご案内
The 6th Asia Pacific Symposium on Music Education Research
ISME Regional Conference in Asia Pacific Region (July 25-27, 2007)



APSMER Advisory Board 委員長
村尾忠廣

第6回アジア太平洋音楽教育研究シンポジウム (APSMER) は、2007年7月25~27日タイのチュラロンコン大学で開催されます。今回は APSMER が10周年を迎えること、また、ISME と連携し、「ISME アジア太平洋地域大会」を兼ねる、という記念すべき大会になります。

APSMER は発足以来、創設者の Gary McPherson と村尾の二人で実質的に運営してきました。が、Gary は ISME の会長となり、その上、シドニー、香港、イリノイ (アメリカ) と大学を異動しました。そのため、これまでのような運営はできません。そのため、APSMER を準学会のような組織にして運営してゆくことにしました。事務局は香港教育大学、事務局長に CHEUNG-YUNG, Wai Yee (Jane) が就任しています。学会の理事にあたる Advisory Board には、これまでの大会実行委員長や地域、参加回数などを考慮してお願いしました。委員長は私、村尾が務めております。今後は、ISME 地域大会としても運営する必要がありますの

で、アジア地区からの ISME 理事である奥忍さんや Bo Wah にもボードメンバーに入っていただきました。APSMER Office の Website は以下にありますので、どうかご覧になってください。

http://www.ied.edu.hk/cape/apsmer_rl/

この website はチュラロンコン大学の APSMER 2007 の website にリンクされています。直接 APSMER 2007 に入る場合には以下の Website をクリックしてください。

<http://www.edu.chula.ac.th/apsmer2007/main.html>

発表申し込みの方法など詳細は上記の Website を参照してください。締め切りは2007年1月31日です。院生、若手研究者も多く参加しています。日本からもベテランだけでなく若手が多数参加し、アジア太平洋地域の「院生、若手研究者のフォーラム」を立ち上げてほしいものです。ふるって発表申し込み、参加していただけますよう、お願い申し上げます。

4. 国内トピックス

「伝統文化の継承と発展—音楽教育の現場から—」

テーマ：声からはじめる日本音楽の指導

(科学研究費補助金研究成果公開発表 (社) 東洋音楽学会 公開シンポジウム)

入 場 無 料

日時：2007年1月13日(土) 午後1時～5時30分

場所：イイノホール

(地下鉄丸の内線・日比谷線・千代田線「霞ヶ関」下車)

ご 案 内

(社) 東洋音楽学会主催，東京都小学校音楽教育研究会，東京都中学校音楽教育研究会ならびに日本音楽教育学会の後援により，上記の公開シンポジウムが開催されます。日本音楽ならびに世界の諸民族の音楽を専門分野とする東洋音楽学会と本学会は，妙高ゼミナールやプロジェクト研究において共同研究を進めてきました。音楽学，実演家，音楽教育学が共同しながら日本音楽の指導のこれからを探るシンポジウムとして，大きな意義をもつものです。多数のご参加をお待ちしています。

プ ロ グ ラ ム

第1部 基調講演「声からはじめる日本音楽の指導」：

小島美子(国立歴史民俗博物館名誉教授)

第2部 公開シンポジウム「伝統文化の継承と発展—音楽教育の現場から」

パネリスト：

大熊信彦(文部科学省教科調査官)，山内雅子(小金井市立小金井第一小学校)，清水宏美(立川市立立川第二中学校) 小塩さとみ(宮城教育大学)

第3部 ワークショップ「日本音楽の新しい指導方法 声をつかいこなそう！」

1) 唱歌でつかむ日本音楽

—能楽囃子の唱歌から—

講師：大倉源次郎(能楽大倉流小鼓方)

竹市 学(能楽藤田流笛方)

2) 声でつかむ日本音楽

—はなしことばから地歌まで—

講師：上西律子(わらべうた) <ことごと俱樂部>のこどもたち/狩谷春樹(箏曲家)

中村仁美(雅楽演奏家)

米川裕枝(地歌箏曲家)

5. 新刊案内

『仕組まれた学習の罫』（柳生力）、『からだと音』（対談：柳生 力・山田 隆）
CD—1「リコーダーと合奏による学級演奏」、CD—2「リコーダー ソロと
アンサンブル」CD—3「リコーダー小曲集」

紹介・推薦：村尾忠廣（愛知教育大学）

柳生力、山田隆という二人の音楽教育実践のことを今の音楽教師の大多数は知らない。そして何も問題意識をもたぬまま平気で教科書教材の「聖者の行進」をリコーダーで演奏させている。楽器にはその音をつくりだしてきた文化、歴史がある。リコーダー教材としての「聖者の行進」はあまりにもそのことを無視している。柳生氏がオルフやバロック音楽にこだわり、「教材自体の指導力」と述べたのはそのためである。そして、その実践に触発され、これをく真似る>授業を始めたのが他ならぬ山田隆氏であった。山田隆氏はやがてリコーダーを篠笛に代え、邦楽教育へまい進してゆくようになる。楽器にはその音をつくりだしてきた文化と歴史がある、という理念からすれば、必然的な軌道

修正であったのかもしれない。いずれにせよ、二人の音楽教育実践は日本の宝である。それがどんな宝なのか、今私たちは誰もが知ることができるようになった。上記の本、CDが発刊（複刊）されたからである。ぜひとも、二人の音楽教育実践の輝きに触れてほしいと思う。自費出版のため、購入には、下記の e-mail か Fax で申し込んでほしいとのことである。

購入先：fujiiy@mbr.nifty.com

Fax: 06-6675-5885（藤井）

価格:書籍は各 1,500 円, CDは各 1,000 円

振り込み先：三井住友銀行

店番 178（堺支店）・口座 7010098

氏名 藤井 淑子（フジイヨシコ）

事務局からのお願い・お知らせ

- ・会則・諸規程が改定されました。新会則・諸規程は、『音楽教育学』第36巻2号をご覧ください。
- ・今年度会費を、まだお納めいただいていない会員は、至急振込みをお願いいたします。
- ・住所やご所属などに変更のある会員は、早めに事務局へお知らせください。
特に、入会時に大学院生だった方で、現在学籍をお持ちでない方は、変更の連絡をお忘れなく。
なお、来年度は理事・会長選挙が行われます。選挙人名簿を確実にお届けするためにも、変更の連絡にご協力ください。
- ・地区例会や日韓ゼミナールなどに関する最新情報は、学会 HP に掲載いたします。定期的に HP をご覧ください。
- ・事務局業務は、以下のとおり行っております。

業務時間 月・水・金 10:00～16:00

事務局スタッフ 中村幸子・岩淵育子・永岡和香子・山本華子

編集後記

今号の編集にあたり、日本音楽教育学会の学会活動におけるニュースレターが果たすべき役割は何か、編集責任者が果たすべき役割は何かについて考え続け反省し続けた日々でした。とくに、国内トピックス、会員の動向・活動について、どうすれば幅広い会員の声や活動を集めることができるのか、その方法を講じることを今後の課題として検討していきたいと思います。会員のみならずまからのご提言をよろしくお願いいたします。 (加藤富美子)

「真綿色したシクラメンほど、清しいしいものはない。」 (小椋佳)

冬の代表的な花と言えば、いつしかシクラメンになってしまいました。布施明の歌う「シクラメンのかほり」によって日本の冬の代表的な花になったのだとか。少なくとも、私の子どもの頃にはありませんでした。その花を小椋佳は「清しい」と書きました。因にワープロ変換いたしますと「酔が強い」となります。まだ完全には市民権を得ていないようです。それはそれとして、この歌には60年代には一切存在しなかった「サビ」が登場します。このサビの歌詞「疲れを知らない子どものように、時が二人を追いかけてゆく」は何という魅力的なフレーズでしょうか。当時の若者は思わず<涙>したものです。今どきの学生はこうした短調の曲を歌うと「暗い」と言います。哀愁の青春抒情歌だったのですが。



(村尾忠廣)

【日本音楽教育学会役員 2005-2007年度】

会長：坪能由紀子 副会長：岩崎洋一・加藤富美子

常任理事：小山真紀（事務局長）、佐野 靖・村尾忠廣（総務）

阪井 恵・島崎篤子・降矢美彌子（企画）今川恭子・奥 忍（会計）

岩井正浩（編集委員）

理事：寺田貴雄（北海道）、宮野モモ子・井口 太・熊木眞美子・山本文茂（関東）

篠原秀夫・中山裕一郎（北陸）、南 曜子（東海）

安田 寛・嶋田由美・若尾 裕（近畿）、小川容子（中国）、田邊 隆（四国）

木村次宏（九州）

参事：大石あゆ美・大沼覚子・駒久美子・夏目佳子・藤波ゆかり・裴珉卿・間瀬三奈

【事務局住所】〒184-0015東京都小金井市貫井北町2-5-22ハイッシーダ1-102

【私 書 箱】〒184-8799東京都小金井郵便局私書箱26

Tel/Fax : 042-381-3562 e-mail : onkyoiku@remus.dti.ne.jp

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jmes2/index.html>